

【書評】

カトーの『農業論』について

川越俊彦

書評は新刊書を採り上げるのが通例であろうが、ここでは少し古く半ば歴史に埋もれているようではあるが、極めて興味深い一冊に焦点を当ててみたい。表題のカトーの『農業論』である。より正確には、著者はMarcus Porcius Cato (234 - 149 B.C.)、所謂、大カトーであり¹、書名はDE AGRI CULTURA、直訳すれば『農耕について』となろう。出版年と言う概念を現代的な意味で適用することは不適切と思われるので、本書の執筆時期を求めれば、紀元前160年頃、つまり今からおよそ2200年前に書かれた著作である。本書の著作権は当然ながら消滅しているので、そのラテン語原文はインターネット上のPublic domainに公開されており自由にアクセス可能である。紙の書籍としてはギリシャ・ラテン語文献専門のLoeb古典文庫に羅英対訳として収録されている。このLoeb文庫版はW. D. HooperとH. B. Ashによるもので、1934年(1935年改訂)の出版であるが、現在でも入手可能である。これ以降の英語への翻訳に関しては、Andrew Dalbyによる*Cato on Agriculture*が1998年に、やはり羅英対訳として出版されている。Dalbyはその冒頭でHooper and Ash以来60年ぶりの英訳と述べており、実際、検索にもその他の出版の記録は現れないので、近年の英訳に関してはこの2書のみということになる²。邦訳については寡聞にして見つけることができなかった。そこで、ここではLoeb版とDalby版を手掛かりとして、カトーの農業論についてその概要を紹介しつつ、若干のコメントを付け加えたい。その内容に立ち入る前に先ず著者について簡単に触れておくのが適当であろう。

1. 著者について³

著者のMarcus Porcius Catoは紀元前234年にローマ近郷の自治都市Tusculum⁴で農家の息子として生まれている。父親は平民出身のローマ市民であった。少年時代は農業を手伝っていたようであるが、その後軍務に付き、軍人として数々の功績を挙げている。特に第二次ポエニ戦争(219 - 201 B.C.)での功績を契機に官僚・政治家として地位を確立していった。紀元

¹ 彼の曾孫のMarcus Porcius Cato Uticensisと区別するためにCato Major(大カトー)と呼ばれる。因みに曾孫の方は小カトーである。

² この他に、羅仏対訳版としてNisard(1856, pp.1-51)、Goujard(1975)がある。

³ 本項の記述はDadly(1998)及びOCD(1996, pp.1224,5)に負うところが大きい。

⁴ Tusculumは後にCiceroが*Tusculan disputations*を執筆した街として知られている(King 1945)。

前204年にquaestor (財務官) に選出されたのを皮切りに, aedilis (造営官, 199 B.C.), praetor (法務官, 198 B.C.) を経て, 紀元前195年には共和制ローマの最高官職である consul (執政官) に選出されている。また, 184年には censor (監察官) に就任し, 貴族の腐敗を厳しく取り締まったことが知られており, その政治姿勢は保守的でギリシャ文化の影響に批判的であったと言われている。他方, 著作も多く, 歴史, 軍事, 農業等様々な分野で執筆しており, また演説原稿も書き留めていたことが後年の Cicero 等の引用⁵から伺えるが, それらの原文は現存せず, ここで採り上げる『農業論』が彼の直接の著作として纏まった形で伝わっている唯一のものである。

2. 農業論について

DE AGRI CULTURA (農耕について) は現存する最古のラテン語散文とされるが, これを『農業論』と題すると少々誤解を与えるかもしれない。その内容を Hooper and Ash (1935) の底本によって観てみよう。本書は短い序文と 162 節の短文で構成されている。もちろんこの節立ては後世に便宜上の都合から付加されたものであり, Cato の原文には節立てもなければ現代的な意味での句読点もなかったはずである。短文の内容は農園経営のための様々な助言から, 雑多な農作業の実務の解説, 農村生活のコツから料理のレシピに亘っており, それらが一定の方針を持って構成されることもなく, 半ば雑多に並べられているのである。いわば, 篤農家がつれづれに書きためた雑記帳と言えばそのイメージを得ることができるかもしれない。更に, 各節は比較的長いものから極めて短いものまで様々である。例えば, 農園監督の任務について述べた V 節は 400 語弱あるのに対し, 番犬の飼い方を助言する 124 節はたった 11 語でしかなく, その前後の節は全く別の事柄を扱っている。それ故かラテン文学者もこれを文学作品と呼ぶのは難しいらしく, 最古のラテン語散文としての価値は認めつつも必ずしもその評価は高くないようである。

それでも本書の前半は比較的纏まっており, 1～73 節は農園経営に関する記述となっており, 農園の入手方法や建物の建造, 農園監督の管理といった農園経営の基本 (1～22 節) から年間を通じた農作業の注意点・助言 (23～73 節) で構成されている。後述するように, 経済, 農業経営学の視点から興味深いのはこの箇所である。続く 74～88 節は主として料理のレシピであり, 89 節以降は内容的にかなり雑多なものを含んでいる。

⁵ Cicero の *Tusculan disputations* には, Cato の歴史書 *Origines*, 彼の演説についての言及があり, これらが文書として存在していたことがわかる (King 1945, pp.4,5)。

3. 興味深い二三の事実

例えその文学的価値が低いとしても、これを経済、農業経営学的視点から眺めると、極めて興味深い記述が見いだされる。以下その例を二三挙げてみよう。

先ずCatoはその冒頭でなぜこの著作を記すのかを述べている。即ち、「商業は時として大きな利益をもたらすが危険であり、金貸しも同様で不名誉である」と述べた上、古代ローマの十二表法において、窃盗で告発された場合、その賠償は2倍返しであるのに、高利貸しは4倍返しであることに言及して、高利貸しは盗人以下の評価を受けてきたと糾弾し、これに対して農業は高い評価を受けてきたと主張する。Catoによれば、農民の子弟は頑健で勇敢な兵士であり、農業収益は安全で人から妬みを受けることもないのであり、それが本書を記述する理由であると言うのである。農民出身の軍人であったCatoらしい主張ではあるが、ここで興味深いのは農本主義的思想が既に明確に示されており、更に現在までも広く流布している商人悪徳説（善良な農民とこれを搾取する悪徳商人というステレオタイプ）の観念が読み取れることである。もちろん商人を否定的に捉えるのは、ヘレニズム文化からの影響とも考えられるが、Catoの本書の他の箇所に現れる経済合理的な思考からすると若干の意外感があるのも事実である。尤も、Catoの商業への否定的態度はそのリスク故とも読み取れるのではあるが。

さて、続く第1節では、農園を購入したい者のための助言を与えているが、その最後に、最良の農園とは何かと問われれば、良い立地の様々な農地で構成される100iugera（約25ヘクタール）⁶の土地で、ワインを豊富に産出する葡萄園が最高で、2番目に灌漑された蔬菜園、3番目に柳の林地、4番目にオリーブ畑、5番目に草地と続け、6番目に漸く穀物畑が登場する。この順序は古代から論争となっていたようであるが、一つの解釈は、当時打ち続く戦乱のために自営農民が衰退し、ローマは穀物を輸入するようになっており、他方、国内の土地に関しては富裕層による農園の囲い込みが行われ、奴隷労働力（戦争捕虜）に依存した畜産が広まった結果、穀物生産で収益を上げるのは困難になっていたと言うものである（Hooper and Ash 1935, pp.6,7）。つまり、そこには比較優位による産業構造の変換のもとで、どのようなビジネス・モデルが望ましいかについての合理的な経営判断が示されていると言えよう。

このようにカトーの『農業論』は紀元前2世紀のローマ農業の実態を生き生きと伝えるだけでなく、その中に、その後流布する経済観念が既に見て取れたり、経済メカニズムが貫徹する姿が読み取れたりといった意味で興味深い文献であり、もっと注目されても良いのではないかと考える。

（成蹊大学経済学部教授）

⁶ 土地面積を測る単位で1 iugerumは240 pedes × 120 pedesで1 pesは1ローマンフィート（約26.3 cm）より、約0.25 haとなる。但し、pedesはpesの複数形、iugeraはiugerumの複数形である。

引用文献

- Dalby, Andrew (1998) *On Farming De Agricultura*, Totnes, Devon: Prospect Books.
- Goujard, Raoul (1975) *Caton De l'agriculture*, Paris: Les Belles Lettres.
- Hooper, W. D. and H. B. Ash (1934, Revision 1935) *Cato and Varro On Agriculture*, Loeb Classical Library (LCL283), Cambridge: Harvard University Press.
- Hornblower, Simon and Antony Spawforth eds. (1996) *The Oxford classical dictionary* (OCD), 3rd edition, Oxford ; New York ; Tokyo : Oxford University Press.
- King, J. E. (1945) *Tusculan disputations / Cicero*, Revised Edition, Loeb Classical Library (LCL141), Cambridge, Mass. : Harvard University Press.
- Nisard, Désiré (1856) *Les agronomes latins : Caton, Varron, Columelle, Palladius*, Paris : Firmin Didot.